

多重 Sluicing と Swiping の義務的削除についての一考察

平田拓也

1. 導入

動詞句省略などにみられるように、削除操作の適用は一般的に随意的であると考えられている。しかしながら、(1a)の多重 Sluicing と(2a)の Swiping では、削除の適用は義務的である。例えば、(1a)の多重 Sluicing は文法的であるが、(1b)の削除が適用されていない対応する文は非文になる。同様のことが、(2a)と(2b)でも観察される。

- (1) a. ?One of the students spoke one of the professors, but I don't know which to which. (Lasnik (2014: 4))
b. *One of the students spoke one of the professors, but I don't know which spoke to which. (Lasnik (2014: 4))
- (2) a. Lois was talking (to someone), but I don't know who to. (Merchant (2001: 65))
b. *Lois was talking (to someone), but I don't know who to Lois was talking. (Merchant (2001: 65))

本稿は、この義務的削除を Fox and Pesetsky (2003)で提案された循環的線形化の仕組みを用いて説明を試みることを目的とする。具体的には、これらの構文の派生においては、TP 内にある要素と残余要素との間に線形化の矛盾が生じ、その矛盾を解消するために義務的に削除が適用されると主張する。

2. 理論的背景: Fox and Pesetsky (2003)

Fox and Pesetsky (2003)は循環的線形化の仕組みを提案している。この仕組みのもとでは、Spell-out Domain と呼ばれる統語領域が形成される毎に Spell-out が適用され、線形化の情報が確立される。そして、各 Spell-out Domain において確立された線形化の情報が互いに矛盾しなければ適格となる。彼らによると、Spell-out Domain は Phase に対応するとしており、CP, vP, DP が Spell-out Domain であると仮定されている。

この仕組みのもとでは、(3)の wh 疑問文は(4)の派生を持つ。A > B は A が B に先行することを示す。

- (3) What did you buy?
(4) [CP what did [TP you [vP t_{what} [vP t_{you} buy t_{what}]]]]
1. vP: what > you > buy 2. CP: what > did > you > buy

本稿では、紙幅の都合上、議論に関係する Spell-out Domain のみを示す。(4)の派生では、what が基底生成位置から、vP 指定部へと移動する。その後、この vP に Spell-out が適用され、1 で示される線形化の情報が確立される。その後、派生がさらに進み、CP 指定部へと what が移動する。その後、CP に Spell-out が適用され、2 で示される線形化の情報が確立される。これらの情報は互いに矛盾しないため、(4)の派生は適格となる。

また、Fox and Pesetsky では、線形化の情報が起きた場合、当該の要素を含む領域を削除することにより、線形化の矛盾を解決する方法を提案している。本稿では、この削除による線形化の矛盾の解決策を採用する。

3. 分析

多重 Sluicing と Swiping の分析に際して、本稿では(5)の仮定を採用する。

- (5) a. Spell-out Domain は ForceP, vP, PP である。
b. Deletion domain は TP である。
c. Spell-out Domain を越える移動はエッジを経由する必要はない。

Totsuka (2013)では、ForceP は Phase であると提案されている。この提案が正しいとすると、ForceP が Spell-out Domain であると仮定するのは、問題がないように思われる。また、Sabbagh (2007)では、PP が Spell-out Domain であると仮定しているので、本稿でもこの仮定に従う。最後に、vP は Phase であるという標準的な仮定に従い、vP も Spell-out Domain であると仮定する。(5b)の仮定は、Merchant (2001)の Sluicing の削除領域は TP であるという仮定に従っている。

これらの仮定の下で、(6)として再掲される多重 Sluicing は(7)のように派生すると提案する。

- (6) ? One of the students spoke to one of the professors, but I don't know which to which. (Lasnik (2014: 4))

- (7) a. [_{vP} which spoke to which]
 1. vP: which>spoke>to>which
 b. [_{ForceP} which [_{Force'} to which [_{Force} Force [_{TP} *t*_{which} [_{T'} T [_{vP} *t*_{which} spoke to which]]]]]]]
 1. vP: which>spoke>to>which, 2. ForceP: which>to>which>spoke
 c. [_{ForceP} which [_{Force'} to which [_{Force} Force [_{TP} ~~*t*_{which}~~ [_{T'} T [_{vP} ~~*t*_{which}~~ spoke to ~~which~~]]]]]]]
 PP: to>which, ForceP: which>to>which

ここでは、線形化の矛盾を引き起こしている要素を下線で示す。まず、(7a)の段階で vP が形成され、この vP に Spell-out が適用され、1 で示す線形化の情報が確立される。次に、(7b)において which と to which が ForceP 指定部へと移動し、ForceP が形成される。その後、ForceP に Spell out が適用され、2 で示す線形化の情報が確立される。しかし、1 と 2 の線形化の情報は to which が spoke に先行し、かつ後続する点において矛盾が生じている。しかし、(7c)のように spoke は TP の削除に伴い、線形化の情報から取り除かれるため当該の矛盾は解消される。したがって(7)の派生は適格となる。

一方、削除が適用されないことを除けば、(1b)も(7)と同様の派生をたどる。しかし、(1b)の場合には、削除が適用されないために当該の矛盾が解消されないため非文となる。

次に、(8)として再掲される(2a)の Swiping は(9)の派生を持つと分析される。

- (8) Lois was talking (to someone), but I don't know who to. (Merchant (2001: 65))
 (9) a. [_{PP} who [_{P'} to t_{who}]]
 1. PP: who>to
 b. [_{vP} Lois talking [_{PP} who [_{P'} to t_{who}]]]
 1. PP: who>to 2. vP: Lois>talking>who>to
 c. [_{ForceP} who [_{Force'} Force [_{FocP} [_{PP} *t*_{who} to] [_{Foc'} Foc [_{TP} Lois was talking *t*_{pp}]]]]]]]
 1. PP: who>to 2. vP: Lois>talking>who>to 3. ForceP: who>to>Lois>was>talking
 e. [_{ForceP} who [_{Force'} Force [_{FocP} [_{PP} *t*_{who} to] [_{Foc'} Foc [_{TP} ~~Lois was talking *t*_{pp}~~]]]]]]]
 who>to

(9a)の段階で、to が who と併合し、その後 who が to の指定部に移動し、PP が形成される。その後 PP に Spell-out が適用され、1 で示す線形化の情報が確立される。その後、派生が進み、(9b)において vP が形成され、Spell-out の適用により 2 の線形化の情報が確立される。(9c)の段階で、who to が FocP 指定部へ移動し、who だけが ForceP 指定部に移動し、ForceP が形成される。Spell-out の適用により、3 で示す線形化の情報が確立される。しかしながら、2 と 3 の線形化の情報において、who と to が Lois と talking に先行し、かつ後続することになり、矛盾が生じる。しかし、(9d)に示されるように、この線形化の矛盾は TP の削除に伴い、Lois と talking が線形化の情報から取り除かれることにより解消される。したがって、(9)の派生は適格となる。

一方、(2b)の派生は、削除がないことを除けば、(9)と同じである。したがって、同様の線形化の矛盾が生じるが、削除の適用がないためこの矛盾は解決されない。そのため、(2b)は非文であると説明される。

4. 結語

本稿では、(1a)の多重 Sluicing と(2a)の Swiping における義務的削除について、Fox and Pesetsky (2003)で提案された循環的線形化の観点からの説明を試みた。本稿の提案のもとでは、これらの構文の義務的削除は TP 内に含まれる要素と残余要素との間で生じる線形化の矛盾を解消するために義務的に適用されなければならないと説明される。一方、(1b)と(2b)では、削除が適用されず、線形化の矛盾が解消されないために非文になると説明される。

参考文献

- Fox, Danny and Pesetsky David (2003) "Cyclic Linearization and the Typology of Movement," ms., MIT. / Lasnik, Howard (2014) "Multiple Sluicing in English?" *Syntax* 17, 1-20. / Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford. / Sabbagh, Joseph (2007) "Ordering and Linearizing Rightward Movement," *Natural Language and Linguistic Theory* 25, 349-401. / Totsuka, Masashi (2013) "On Phase Head in Split CP Hypothesis," *English Linguistics* 30, 204-215.